

二ごみ日和

京都発！ごみ減量情報誌

109号

「子どもの発想から広がる環境教育と地域のつながり」

たかつかさ児童館 館長 溝口晋太郎さん

京都市ごみ減量推進会議・事業者の取組

手を取りあって、30年

Hand in Hand

地域だからできる、学生服の資源循環

なごみ日和

「次世代へ日本の伝統をつないでいくために…」

祝・設立30周年！～その歩みを振り返って～

京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会

もっぺん物語

「ミスターミニットゼスト御池店」



京都市ごみ減量推進会議

表紙デザイン：嵯峨美術大学芸術学部デザイン学科グラフィックデザイン領域2年次生 明石桃

子どもの発想から広がる 環境教育と地域のつながり

社会福祉法人 京都保育センター たかつかさ児童館
館長 溝口 晋太郎さん



児童館といえば小学生が通う場という印象だが、京都市北区にある「たかつかさ児童館」では0歳から18歳までがそれぞれのペースで集う地域のHUB（拠点）としての役割を果たしています。「こどものいけんばこ」や模擬選挙など、こどもたち一人ひとりの主体性を尊重し「こどもまんなか」を真摯に実践する同館。リサイクル回収拠点としての側面を持ち、環境への取り組みも日々の営みの中に息づいています。子どもの成長へのまなざしと環境への視点がやさしく重なり合う、同館の温かな場づくりの深みに迫ります。

ごみだと思っていたものが 子どもの遊びに変わる

「たかつかさ児童館」を訪ねた日は、スタジオぐるりによる「ハイザイアート」のワークショップの日。開催されるのは2回目だそう。どんなきっかけで始まったのか、館長の溝口さんに話を伺った。「学童クラブとして放課後に小学生をお預かりしている関係で、毎日おやつを提供をしています。その時に、プリンのカップとか、お菓子の空き箱とかが毎日たくさん出るんですね。これまでは、そのまま廃棄するか、たみに廃



「まず手を動かすこと」を大切に地域から集めた廃材や不用品を素材としたハイザイアートを開催している「スタジオぐるり」

品回収に出すくらいしかしていませんでした。そんな時に、京都市ごみ減量推進会議会長の中田富士男さんから『スタジオぐるり』さんのことを聞きました。児童館の活動とエコの活動って、すごく親和性があると感じたんです。1回目のワークショップの後、児童館の中に『廃材コーナー』を作りました。ラップの芯や牛乳パック、プリンのカップなどをいっぱい置いて『いつでもここで工作していいよ』というコーナーにしました。特別な企画やイベントを連発するのは運営的にも難しいですし、児童館の基本は毎日の日常。だからワー



りんごの梱包材、コルク、段ボール端材、シールの端材、紙管、布やニット地の端材など、様々なハイザイが用意されていた



クショップを一度きりのイベントで終わらせるのではなく、日常的に復習できる形にしたかった。子どもたちの日常の遊びの選択肢が一つ増えました」と溝口館長。「子どもたちの遊びの発想の豊かさは本当にすごいです。大人が『こうしなさい』と枠をはめず、スタッフもヒントやサポートにとどめ自由に作る面白さを大切にしています。何に使えるかわからないものだからこそ発想が広がる。活動を始めてから『このプリンカップ持って帰りたい!』と言う子も増えました。子どもたちにとって、廃材はもう『ごみ』ではなく、何かを生み出す素材になっているんですね。夏休みの自由研究に取り組む子もいます。やりたい子が自分のペースでじっくり作れる環境ができたことも、良い経験になっていると感じています」。社会福祉士であり保育士でもある溝口館長。子どもたちの今だけでなく、長い目でその可能性と成長を見つめている。



リサイクル回収と多世代の地域交流

たかつかさ児童館には、コミュニティ回収のボックスが置いてある。古紙（ダンボール・雑紙）・古着、牛乳の紙パック、使用済みてんぷら油、乾電池などの回収拠点となっているのだ。親御さんに頼まれて子どもたちが持ってきたり、親子でいっしょに持ってきたりする家庭もあり、地域の人たちとのゆるやかなつながりが生まれているようだ。「たかつかさ児童館で、焼き芋を焼くイベントなどすると

きには、近くの団地の方に事前にお願いのチラシを入れるんです。そして、よかったら食べにきてくださいと伝えています。そうすると地域のご高齢の方とのつながりも生まれ、リサイクルの拠点としても立ち寄ってくださることで、地域みんなで子どもたちを見守る流れもできればと考えています」と溝口館長。「リサイクル」を通して、ゆるいつながりが生まれる、そんな地域交流の可能性を感じた。



入ってすぐの場所にコミュニティ回収のボックスが置いてある

主体性から広がる環境へのまなざし

児童館に入っすぐに筆者が気になったのが「かくれる図書室」。女の子二人が狭い狭い空間にぴったりと二人で入っておしゃべりしていたのだ。保育士の勘で「あれはわざと狭いんですね？」と聞いてみたら、やはりそうだった。これもこどもたちの発案なのだそう。図書室に置く本を選挙で決めたり、かくれる図書室をこども発案で決めたり、「こどもまんなか」を実践する、たかつかさ児童館。教育と環境問題、一見、遠く見えてしまう別ジャンルだが、「主体性」はいつか自分が生きる「環境」に意識を向けることにつながるの、実は、そう遠くないジャンルだ。児童館に多世代が集まり、ハイザイで遊んだり、リサイクル回収ボックスに入れたり、身近なところで環境への意識が少しずつ育つ。たかつかさ児童館の存在は、ゆるやかな環境教育として、こどもたちの心に根づいていくのではないだろうか。



京都府の木材活用事業を利用してつくった「かくれる図書室」



社会福祉法人 京都保育センター たかつかさ児童館

京都市北区大將軍坂町8-1

<https://takatsukasazidoukan.jimdofree.com/>



＝京都市ごみ減量推進会議・事業者の取組＝ 手を取りあって、30年

はじめての道を歩いてきた。
市民・事業者・行政の協働体制で…。



多彩なテーマで120回「企業向け実践講座」

さてさて、時は1997年、京都市ごみ減量推進会議の創成期。市民・事業者・行政の協働による組織体を立ち上げたもののお手本になるような事例もなく、企業に対してどう動けばいいのか…。

環境省は、資源有効利用促進法（1991）を皮切りに、容器包装リサイクル法（1995）、家電リサイクル法（1998）、建設リサイクル法（2000）、食品リサイクル法（2000）、自動車リサイクル法（2002）と、矢継ぎ早に新たな法の制定に向け活発な動きを見せていた。

製造・販売などの事業者は、新たな動きに神経をとがらせていた。産業廃棄物マニフェストの作成・提出が義務付けられるなどの制度への対応も迫られていた。そんな中で手探りながら始めた企業向け講座。

きっかけとなったのは1999年（平成11）開講した、企業向け学習会だった。

テーマは「日新電機。廃棄物計量システムに学ぶ」。最新の具体事例を紹介する内容は、差し迫っていたごみ減量策の参考となり、好評を得た。その後、本格的に企業向け実践講座のスタートとなった。協働による講座事業が幕をあげた。関わりの深かった方々にご登場いただいた。

市民・事業者・行政のパートナーシップが新鮮でした



細川 万理子氏 京都商工会議所産業振興部部長 当時：産業振興部 環境担当

製造現場の管理や取引先との交渉、日々の事務作業など、多くの業務を限られた人数で対応していく中で、ごみの減量や環境に配慮した取り組みの大切さを理解していくことは、中小・小規模事業者さんにとってはハードルが高いものです。そのような中で、市民、事業者、行政のパートナーシップによる京都市ごみ減量推進会議と京都商工会議所との共催で、企業向けごみ減量実践講座がスタートしました。「エコロジーはエコノミーごみ減量実践講座」というタイトルは非常に斬新でわかりやすく、節約、節電、経費節減に取り組むことがエコに繋がるといったことが事業者さんにも共感していただけたと感じました。市民と事業者といった立場の異なる人々が集まり、意見交換する場として本実践講座は非常に意義のある取り組みです。これからもぜひ連携していきたいと思っています。

資源循環型社会への理解を促した



浦野 新一氏 日新電機株式会社 安全環境部環境管理グループ 現在も当事業のコーディネーターとして活動

1900年後半から2000年初めという頃は、廃棄物を取り巻く情勢が大きく変化しました。企業にとっては課題が多く、どこから手をつけていいやら…。講座のコーディネーターとしては、環境省と京都市の方針への理解を深めること、ゼロエミッションをはじめ、各種リサイクル法や実際に企業で解決が急がれる課題を浮き彫りにし、テーマに即して講師を招きました。分別を徹底している企業への見学会なども実施。毎回、実践例を見ることができ、学びがありました。2006年、京都市レジ袋有料化に向けたシンポジウムを開催したことも印象に残っています。3Rというごみ減量の基本や、資源循環型社会への考え方の全体的な浸透において、有意義だったかと。参加できなかった方への情報発信というフォローもあり、時代の大きな転換期において講座は有効だったと実感しています。

廃棄物からエネルギーへ。テーマは拡大へ



岡松 誠一氏 フレームテック有限会社代表取締役 現在も当事業のコーディネーターとして活動

この講座を受講された企業の方々は前向きで、具体策への対応もスピード感がありました。資源循環型社会への移行期にあって、「見て・聞いて・ごみ対策ミニツアー」と見学コースを組み込み、意義あるものになったと振り返っています。今後は、廃棄物の減量やリサイクルだけでなく脱炭素も含めてエネルギーを取り上げることが重要になるのでは…。太陽光エネルギーばかりか、再生可能エネルギー創出への具体化は広がってくるでしょう。現在、京都市において具現化されている食品廃棄物によるバイオマスエネルギーばかりか、熱エネルギー源（水素ガス、アンモニアガス、合成メタン（メタネーション））への燃料活用による大幅なCO₂削減を同時に実現すべく、廃棄物からエネルギーという資源に繋げていくことが課題になると捉えています。

捨てずに生かす。新たな道を開き、事業化へ。

30年間という時間の中で京都市ごみ減量推進会議は、廃棄物に関する情報提供をはじめ、ごみ削減に向けた具体的な事業を立ち上げ実績を重ねてきた。開拓者にも似た代表的な事例をご紹介します。「機密書類リサイクル事業」と「京のお直し屋さんとリユースショップ・もっぺん」。行政主導ではなく、市民・事業者・京都市の協働で立ち上げた事業であり、他自治体からの反響も大きかった2事業。ごみ減を牽引してきた2事業への再認識を深めるとともに、意義を確かめておきたい。

機密書類リサイクル事業 1997年スタート



組織運営においては、分野を問わず、外部には出せない紙文書が発生する。

企業であれば、顧客名簿、社員情報のほか、決算書、給与情報、契約書などだ。

これらは一定期間、保存されるが、規定期間が過ぎれば廃棄される。

京都市ごみ減量推進会議において、機密文書回収事業がスタートしたのは、1997年（平成9）。京都府紙料協同組合の協力を得ての立ち上げだった。

企業では、環境面から機密書類のリサイクルが課題となっていた。再生ルートを探ったところ、大津板紙という製紙会社では、段ボール箱のもととなる紙への再生が可能との情報を得た。紙のサイズも問わず、異なる色が混ざっていても問題なしという。

通常、機密書類処理の第1ステップとなるのは、シュレッター処理による細分化。この事業においては、箱ごと、溶解するため、その手間が掛かからない。箱のまま溶解槽に放り込まれるから、機密漏洩の心配もない。計量も合理的だ。手間がかかると敬遠されがちな再生において、合理的に処理ができると好評を得た。当初は、20社ほどの回収スタートだったが、29年の実勢を重ねた今では150社が参加するまでになった。

ペーパーレス化が叫ばれている現代、機密書類の再生への課題は少なくない。次世代への課題を掴んでおくことが重要であろう。



京のお直し屋さん「もっぺん」 2008年スタート



「牛革バッグの持ち手が切れた」、「雛人形の衣装が破れた」、「使い慣れたマグカップが割れた」などなど…。生活しているといろいろなトラブルが発生する。壊れたり、故障したり…。なんの末練も戸惑いもなく、捨てて新品を買っていた時代があった。1980～1990年代の大量生産、大量消費、大量廃棄…。環境面からも見直しが始まり、資源循環型社会への移行が急務とされていた時代を迎えていた。

京都市では京のごみ戦略21（2003年・平成15）が策定され、2R型エコタウンという考え方も打ち出された。物を捨てるのではなく、修理・修繕して、もう一度物として命を吹き込もう、手を加えて再び使えるようにしよう…。Repair（修理）やRemake（作り直す）。そんな暮らしこそが、ごみの発生抑制や資源循環にかなうと。

もともと京都には「もったいない」とか「始末」という言葉に象徴される暮らしの基本が息づいていて、見回せば、修理や修繕の技を有する職人さんたちも、生業を立てていた。

当時、京都市ごみ減量推進会議の取組に参画していた学生グループ（同志社大学・京都大学等の学生たちで構成）が中心となって企画を練る中で、2R型エコタウン構築に向けた取組として、修理店の専門サイトを立ち上げる案が浮上。そこに、京都芸術デザイン専門学校の学生も加わって、意見交換を重ね、ホームページのデザインなどの制作を進めた。

意見交換を重ねる中で「京のお直し屋さん」として立ち上げ、名称は「もっぺん」と意見がまとまり、ロゴデザインも決定。すでにお直しの事業を手がけている事業者に声をかけて2008年2月立ち上げとなった。発足当時は30店舗程度だったが、現在は衣服から、時計、パソコンなど、暮らしに関わる事業者が200以上登録している。

「もっぺん」に登録されている平岡ふとん店は「打ち直しの依頼が多い」との声を寄せた。

森田 知都子（2026年8月取材）

地域だからできる、学生服の資源循環 —「売って終わり」にしない、村田堂が描く学生服の未来—

学生服は、毎日の学校生活を支え、友人との時間や学校行事など、多くの思い出をとともに刻んできた大切な衣服です。しかし、卒業後は本人が着用する機会がほとんどなく、「譲る」「保管する」「処分する」といった選択を迫られます。思い出があるため手放せず、長年保管されることも少なくありませんが、そのまま活用されることなく、やがて廃棄されてしまうケースも少なくないのが現状です。一方で、学生服は役目を終えた後も、新たな価値を生み出す可能性を秘めています。その可能性に着目し、地域に根ざした学生服小売店として資源循環に取り組んでいるのが、京都市の村田堂です。

衣服で人を育て、人を創る企業

村田堂は、明治22年の創業以来137年にわたり、中学高等学校の学生服を販売してきた京都最古の学生服販売店です。「学生服は教科書と同じく、学校教育にとって必ず意味があるものです」と語るのは村田堂代表取締役 長屋博久氏です。学生服には、学校生活を送る意味や学校の教育理念が反映されていることから「学生服＝教材」という考えのもと、村田堂では、生徒に対して学校で制服の着こなし講習を実施するなど、衣服を通して心を育む「服育」に力を入れています。

また長屋氏は、「生徒自身が、自分たちの着ている制服を卒業後どうしたいのか考えてほしい」と語ります。学生服を大切に着ることや、その背景にある学校の思いを知ること、卒業後の学生服を「不要なもの」ではなく「次につ

ながる資源」と捉える意識にもつながるはずです。企業だけでなく、着用する学生たち一人ひとりが制服の価値を知り、捨てる以外の選択肢を考えることが、資源循環の実現につながり、持続可能な社会への第一歩になるのではないでしょうか。

「売って終わり」にしないために

村田堂では、販売した学生服を回収し、資源として循環させる独自の仕組みを整えています。現在は「学生服 Second-form プロジェクト」を立ち上げ、不要になった学生服をペンケースなどの異なる形へアップサイクルする活動を進めています。Second-formには、「役目を終えた学生服 (Uniform) を「第二の形 (Second-form)」へ生まれ変わらせ、思い出とともに使い続けてもらいたい」という願いが込められています。この活動では、「カワイイ！使ってみたい！と思えるデザインや価格であることが大切」とのこと。「かわいいから使う」という消費者の行動が、資源循環を支える最後の重要なステップだからです。

さらに、加工後に残った生地も車の内装材などへリサイクルすることで、できる限り廃棄物を出さない循環を目指しています。その原点にあるのは、「自分たちが売ったものを、ごみにしたくない」という思いです。販売だけで終わらせるのではなく、回収から資源循環まで見据えた取り組みは、村田堂ならではの強みとなっています。

地域に根ざした小売店だからこそできること

村田堂は、「地域に根ざした小売店として何ができるか」を常に問い続けてきました。その思いは、学生服を単なる商品としてではなく、地域の生徒とともに歩む存在として捉え、その役目を終えた後まで見据えて取り組む姿勢に表れています。

私自身、学生服は「もう着ることはないけれど、捨てたくない」と思える特別な存在でした。だからこそ、その思いを大切にしながら新たな価値へとつなげる村田堂の取り組みに、学生服のさらなる可能性を感じました。

ライター 京都女子大学家政学部生活造形学科4年生 細井 美晴



- ● 第50回「次世代へ日本の伝統をつないでいくために…」 ● ●
- 伝統文化を次世代に継承していくために…そんな想いをこれまで幾度となく取材させて頂きました。その中でお会いした、株式会社 和えるの代表 矢島里佳さん。「幼少期から暮らしの中で日本の伝統の優しさや魅力を体感してもらうことで自然に次世代や周囲に伝えられる人になってほしい」、そんな想いから、矢島さんは“0歳からの伝統ブランドaeru”を立ち上げ、全国の職人さんたちと大人になっても長く使える食器や藍染めの産着などオリジナルで展開されています。
- そんな「和える」は、幼稚園や保育園などで子どもたち向け

海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京都経済テラス キュンと!」、ラジオ「さらピン!キョウト」などに出演。

に伝統文化に触れるワークショップをひらいています。その費用は、同じく「和える」が開催している外国人向けの茶道体感ワークショップ参加者からの寄付で賄われています。もともとは参加者の、チップを渡したいという声を受け、それならば子どもたちに無償で文化教育を継続的に届けるための費用にできないかと考え、協力を呼び掛けるようになったそうです。今、この形が実を結び始め循環の輪が広がっています。辛いことや悲しいニュースも絶えない世の中ですが、このようなあたたかい想いがたくさん寄せられていること、また自分にも未来のためにできることがたくさんあることをぜひ多くの人にも感じてほしいと思いました。

和えるでは、一緒にこのとりくみを広げていきたいという方や、子ども向けワークショップを開催してほしい園や施設を募っていらっしゃいます。これからも、この輪が広がっていきますように。



人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第37回

ミスターミニットゼスト御池店

「スニーカーを修理できると思っている人が少ない」そうおっしゃったのが香浦誠司さん、ミスターミニット御池店の店長だ。

このお店は靴、傘等の様々な品の修理を行いお客様の困ったを解決する。地元の人に多く利用されているお店だ。香浦さんがこの会社に入ったきっかけは「靴が好き」だ。修理はしたことがなかったけれど、ミスターミニットで「こういう修理ができるんや」と知り、はまったという。ここではスニーカーのお直しもすることができる。すり減ったかかとに新しいゴムを足したり、ソールを丸ごと交換したりと色々な事が出来るのだ。

スニーカーの修理は最近増えており、靴底が剥がれるような糊のトラブルの依頼は1日2、3件来るそうだ。また、この他にも踵の内側の破れをお直しする依頼もあるという。



もし、お店で対応不可能な品が来ても自社工場に持っていき、深い専門的な所のお直しまでしてくれる。

「どれだけ元近づけるか」。ここで働き、修理をする上で大切にしていることだ。お客様のイメージ以上の物になったと喜んでいただきたいのだそう。

最後にこれからの展望を尋ねた。『地道にお客様のご要望に答えていく。それを繰り返すだけ。それでお客様に「ありがとう」と言ってもらえる仕上げをやっていく、それしかないと思っています』。

このお店なら、どのような品物であっても丁寧な対応が返ってくるだろう。長い間愛用しているお気に入りのスニーカーもこのお店に持ち込めばお直しできるかもしれない。一度訪れてみてほしい。



店長の香浦誠司さん

▶ミスターミニット ゼスト御池店
住所 〒604-8091 京都府京都市中京区御池通寺町東入本能寺前町492-1 ゼスト御池 B1F
TEL 075-708-5765

江本 和弥 (2026年7月17日取材)

地域活動レポート

～京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会～

祝・設立30周年！～その歩みを振り返って～

夏休み、多くの子ども達で賑わう京エコロジーセンターで「さをり織り」を体験できるワークショップが開催された。講師は、京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会（以下、めぐるくん推進友の会）の皆さん。1996年の発足以来、日々の暮らしに寄り添ったごみ減量の工夫を丁寧に伝え続ける市民団体だ。めぐるくん推進友の会の30年の歩みを、会長の高橋かつ子さんに伺った。



会長 高橋かつ子さん

ものを大切に、工夫して長く使う心を育みたい

めぐるくん推進友の会は、各区のふれあいまつりや環境イベントで「牛乳パックの紙すき教室」や「さをり織りでミサンガを作ろう！」など、意欲的なワークショップを開催している。これらの環境啓発活動に加え、小学校・児童館での学習会や施設見学会、啓発パンフレットの作成など、活動は多岐にわたる。

「夏休みには、紙すきやさをり織り教室を、寒い季節には石けん教室など、年間を通じて活動しています」と高橋会長。冒頭のさをり織り教室には、100名を超える参加者があったという。材料の糸は、各家庭で余ったものを寄付してもらい活用。「衣類口スについても考えるきっかけになれば」と願っている。



「さをり織りでミサンガを作ろう！」ワークショップの様子

夢のコラボレーションが実現！

実は、この「さをり織りでミサンガを作ろう！」は大学生との協働で実現したアイデア。この他にも、「簡単！あづま袋のつくり方」や「食品ロス削減啓発動画」の作成など、若い世代が面白いと思うことや知りたいと思うことをめぐるくん推進友の会の活動として取り入れている。

協働のきっかけは、コロナ禍。従来型の対面イベントが中止に追い込まれる中、「自宅でも楽しく取り組めるエコ活動」をどのように発信していくのか、模索が続いていた。そんな中、同志社大学政策学部の小谷真理准教授と出会い、小谷ゼミの学生とめぐるくん推進友の会の二人三脚が始まった。「私たちシニア世代は、どうしても考えが固い。研究者や学生さんの柔軟なアイデア、発想の転換に大変助けられました」と高橋会長は当時を振り返る。今年度の小谷ゼミでは、使わなくなったうちの骨に生地を貼って、見た目も涼しい布製のうちわを作るワークショップを実施しており、めぐるくん推進友の会から浴衣や着物の生地を提供し、現在も交流が続いている。

30年、活動の誇り

2006年に京都市の家庭ごみ有料指定袋制が実現し、めぐるくん推進友の会の役割は一つの区切りがついたのでは？という意見もあったが、資源ごみの分別収集、レジ袋の有料化やプラスチック製品の分別収集において、「暮らしに寄り添った丁寧な啓発活動」を続けてきためぐるくん推進友の会の功績は大きい。「会員はシニア世代が中心、皆ボランティア精神に厚く、若い世代を応援しています！」と高橋会長。

2020年度に協働した小谷ゼミの学生の一人が、現在は京都市職員として環境行政の担い手となっている。めぐるくん推進友の会との出会いによって、若い世代が環境活動に興味を持ち、活躍する姿は頼もしい。これこそが、30年の活動の誇りであり、今後もめぐるくん推進友の会ならではの知恵とエールを次世代に伝えていって欲しい。

松村香代子（2026年8月14日取材）

『わたしのごみ減らし術』 ▶ 泡の力で洗剤も容器も減らそう

トイレ、バス、キッチンなどなど…。現代では、住まいの場所ごとに洗剤が出回ってそれぞれ使い分けている方も多いのでは。レフィルを使ったとしてもプラ容器をごみとして出して、経済的にも負担になったり。例えば、重曹とクエン酸を活用すれば、場所ごとに活用できて容器の削減が叶います。臭い消し効果が欲しいトイレにはクエン酸2で重曹1、お風呂にはクエン酸1で重曹2の割合で混ぜて使ってみましょう。ニオイも消え、汚れも落ちてスッキリ。不要になったガラス容器などにクエン酸と重曹を混ぜて水を加えると、みるみる白い泡に変化。これが、効果を発揮するのです。トイレと風呂だけでなく、キッチンでも活躍。排水口の滑りや水垢などシンクの汚れにもどうぞ。

Aska.M